

日本学校教育学会 第 38 回研究大会 プログラム



日本学校教育学会第 38 回大会準備委員会
(白百合女子大学)

＜第38回研究大会に参加される皆様へ＞

*** 配付資料等閲覧のため、情報端末(PCやタブレット)をご持参ください。**

※電源、モバイルバッテリー等もご用意願います。

*** 大会当日、会場で紙媒体での「発表要旨集録」の配付はありません。**

※事前に「発表要旨集録」等をダウンロードし、必要なページをプリントアウトしていただくか、PDFファイルをダウンロードして、ご持参ください。→ 詳細は、p.8をご覧ください。

[発表要旨集録]のあるフォルダのURL

<https://drive.google.com/drive/folders/16pGeGQWDVZwzYvSG4wPsLWjoywSV9mpt?usp=sharing>



[発表要旨集録]のある
フォルダのQRコード



発表要旨以外の発表資料の
電子媒体 (PDFファイル) の
フォルダのQRコード

発表要旨以外の発表資料 (電子媒体: PDFファイル) がある場合の **[発表資料置き場]のURL**

https://drive.google.com/drive/folders/1Ty0-h58jQLihdm9x80IqfJraQKceI4Qh?usp=drive_link

→発表される方の**[発表資料置き場]**へのファイルのアップロードについては、p.7をご覧ください。

*** 白百合女子大学の学内Wifiをご利用いただけます。**

【学内ネットワークのWifiへの接続情報】

SSID : SNET-WLAN

パスワード : 33265050

*** 昼食をご用意ください。**



※大会当日、学食の営業はありません。

また、大学近辺にはコンビニ等がありません。

最寄りの京王線「仙川駅」周辺にコンビニ等がありますのでご利用ください。

京王線「仙川駅」より
白百合女子大学まで
徒歩 約10分

＜プレゼンファイルをプロジェクターで投影して発表をされる方へ＞

*** 発表される方は、発表データのUSB等だけでなく、プレゼンに必要なご自身のPC**

(タブレット)、HDMI(Aタイプ)接続コード(教室機器への接続のため)をご用意ください。

目次

日本学校教育学会第38研究大会の開催にあたって	5
1 研究大会のご案内	6
2 研究大会参加申し込みのご案内	6
3 自由研究発表要領	7
4 お問い合わせ	7
＜白百合女子大学 会場案内図＞	8
課題研究	11
ラウンドテーブル 1 実践者のための論文の書き方講座（実践研究委員会） .	12
ラウンドテーブル 2 活動の成果と今後の方向性（国際交流委員会）	14
ラウンドテーブル 3 学校と市民の教育活動のゆるやかな連携について	16
ラウンドテーブル 4 高校探究学習の考え方・進め方	18
定期総会	22
自由研究発表 1	23
自由研究発表 2	24
自由研究発表 3	25
自由研究発表 4	26
自由研究発表 5	27
自由研究発表 6	28
自由研究発表 7	29
自由研究発表 8	30
自由研究発表 9	31
自由研究発表 10	32
自由研究発表 11	33
自由研究発表 12	34

公開シンポジウム	35
情報交換会	36
奥付	37

日本学校教育学会第38回研究大会の開催にあたって

日本学校教育学会第38回研究大会は、2024年7月27日（土）、東京都調布市にある白百合女子大学において開催いたします。4年ぶりに対面開催となる本大会に、皆様をお迎えできますことを大変光栄に存じます。

本学会は、学校教育に関する実践と理論の緊密化・統合を目指す学校教育の実践者と研究者によって創立された学会であり、理論と実践の往還・融合を目指した活動を特色として参りました。今大会は、課題研究、4つのラウンドテーブル、定期総会、自由研究発表48件、公開シンポジウムを予定しております。一日に凝縮した研究大会となりますが、さまざまな課題について議論が交わされ、より一層研究を深められる機会となりますことを願っております。

今回の研究大会は、課題研究からスタートし、ラウンドテーブル、総会、自由研究発表、公開シンポジウム、情報交換会という新しいプログラム構成で実施いたします。

まず、「課題研究」では、「転換期の学校教育」を共通テーマとした3年間の研究計画の2年目となり、今回は、「転換期の学校と教師－授業の画一化にどう対応するか－」と題して研究協議が行われます。

次に、「ラウンドテーブル」では、4つの企画が設定されています。

ラウンドテーブル1では、実践研究委員会による「実践者のための論文の書き方講座」、ラウンドテーブル2では、国際交流委員会による「国際交流委員会のこれまでの活動の成果と今後の方向性」、ラウンドテーブル3では、自主企画による「学校と市民の教育活動のゆるやかな連携について」、ラウンドテーブル4では、自主企画による「高校探究学習の考え方・進め方－高校総合学習（探究）を中心として－」と題して議論が行われます。

また定期総会を挟んで、午後からの「自由研究発表」では、今回48本の発表申込みをいただき、12の分科会を設定しております。各分科会において、是非、皆様による活発な議論と交流が行われることを願っております。

さらに公開シンポジウムでは、「今、転換が求められる教育観・学校観を巡って～ウェルビーイングな学校・授業を創る～」をテーマとして、コーディネーターと4名シンポジスト、そして皆様とともに、子供たちが明日も学校に行きたい、学ぶことが楽しいと感じるような学校や授業、教師も一人一人が輝き、仲間とともに働きたいと思えるウェルビーイングな学校をつくるためにはどのような取り組みが必要なのか等、議論していければと考えております。

そして、大会の最後には、久しぶりに対面での開催となりますので、会員の皆様の交流の場として「情報交換会」も設けております。是非、日程の最後までご参加いただければ幸いです。

皆様にはご不便をおかけすることもあるかもしれませんが、研究大会準備委員会一同、実り多い大会となるよう精一杯準備と運営に務めて参りますので、皆様のご理解とご協力を賜りたく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

多くの会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日本学校教育学会第38回研究大会
準備委員会委員長 神永 典郎

1 研究大会のご案内

(1) 大会期日及び会場

【大会期日】 2024年 7月 27日 (土) 9:00 ~ 20:00 (情報交換会)

【会場】 白百合女子大学 (〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1丁目25)

(2) 大会日程

時間	8:30~ 9:00	9:00~10:30	10:40~ 11:50	11:50~ 12:30	12:30~ 13:25	13:35~15:35	15:45~17:45	18:00~20:00
内容	受付 (名簿 確認)	課題研究 (90分)	ラウンド テーブル (70分)	昼食 (40分)	定期総会 (55分)	自由研究発表 (120分)	公開 シンポジウム (120分)	情報交換会 (120分)

2 研究大会の参加申込みのご案内

(1) 大会参加の申込み

大会への参加を希望される学会の正会員、及び今回の大会のみ参加の臨時会員、院生・学生会員の方は、各自、以下のチケット販売サイトPeatixより参加費を支払お申し込みください。

大会で発表する方(口頭発表をしない連名の共同研究者を含む)は、それぞれ正会員である必要があります。未入会の場合は、入会後、参加申込みをしてください。

※期限内に入会できるよう、学会事務局に速やかに入会手続きを行ってください。

<付記> 参加申込みと同時に、大会参加費の支払いが行われます。

なお、Peatixの利用にはアカウント登録[無料]が必要です。

(2) 大会参加費

大会参加費は次のようになります。

*正会員・臨時会員	事前申込み	3,000円	※7月20日まで
	直前・当日申込み	4,000円	※7月21日以降~27日まで
*院生・学生会員	事前申込み	1,500円	※7月20日まで
	直前・当日申込み	3,000円	※7月21日以降~27日まで

.....
***情報交換会参加費** 正会員・臨時会員 6,000円 **※7月27日まで**

(是非、ご参加を!) 院生・学生会員 3,000円 **※7月27日まで**

※情報交換会にご参加いただける方は、Peatixで参加申込みをされる際、「大会参加費」に加えて「情報交換会参加費」チケットをご購入ください。

※なお、情報交換会参加費のチケットは、大会参加費とは別に、Peatixより大会当日まで購入することができます。(ただし、コンビニ支払は前日まで。)是非、ご参加をご検討ください。

(3) 大会参加費の支払い

大会参加の申込みは、大会当日まで可能ですが、
「事前申込」と「直前・当日申込」では大会参加費が異なります

事前の大会参加費でお支払いいただけるのは、
7月20日(土)までとなります。

7月21日以降は、「直前・当日申込」の大会参加費となりますのでご注意ください。

【大会参加申込み: Peatix の URL】

<https://2024jase38th.peatix.com/view>

【QRコード】



3 「自由研究発表」の発表要領

(1) 「自由研究発表」の発表時間について

自由研究発表の口頭発表及び質疑応答の時間は、下記の通りとします。

※発表に使用するPC、及びケーブル等はご自身でご持参ください。

■個人研究発表（登壇者が1名）・・・発表 15 分、質疑応答 10 分

■共同研究発表（登壇者が1名～複数）・・・発表 15 分、質疑応答 10 分

※共同研究発表の場合、発表時間内で発表者の分担を行うものとします。

(2) 「発表要旨集録」の電子媒体(PDFファイル)による配付について

※研究大会の関するプログラム・発表要旨集録は、PDFファイルで、以下のURL（Googleドライブ）から配付いたします。

<https://drive.google.com/drive/folders/16pGeGQWDVZwzYvSG4wPsLWjoywSV9mpt?usp=sharing>

※当日は、上記URLのドライブからダウンロードするなどして、各自でプリントアウトしていただくか、情報端末持参いただいてご覧いただけるようご準備をお願いいたします。

※当日、紙媒体による「研究要旨集録」配布はありませんので、事前のご準備をお願いいたします。

※発表要旨集録の準備が整い次第、メールにて参加申込みをされた皆様にお知らせします。



(3) 発表資料の配付について

※発表要旨以外の発表資料（紙媒体）を用意される場合は、当日ご自身で会場にご持参ください。

※電子媒体（PDFファイル）などで事前配付できるよう、以下のURLのドライブに発表資料置き場を用意しました。（提出は任意です）

<https://drive.google.com/drive/folders/1Ty0-h58jQLihdm9x80IqfJraQKceI4Qh?usp=sharing>

※当日までアップロードは可能ですが、参加者に事前にダウンロードして

もらうためには、前日までアップロードされることをお勧めします。

※発表資料は、各自の発表区分（分科会）ごとの発表資料置き場のフォルダに、ご自身で配付するファイルをアップロードしてください。

※その際、ファイル名を次のように付けていただくようお願いします。

＜「自由研究発表3」で、4番目の発表の場合＞

※ファイル名の例： 34〇〇発表題目〇〇〇〇（筆頭発表者名）



(4) 発表の取止めについて

※万一、お申込みいただいた発表を取りやめる場合は、必ず事前に研究大会準備委員会までご連絡ください。（jase38th2024@gmail.com）

4 お問い合わせ

※大会への参加、自由研究発表等に関することについてのお問い合わせは、大会準備委員会の事務局まで問い合わせください。

【大会準備委員会事務局】

白百合女子大学（〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25）

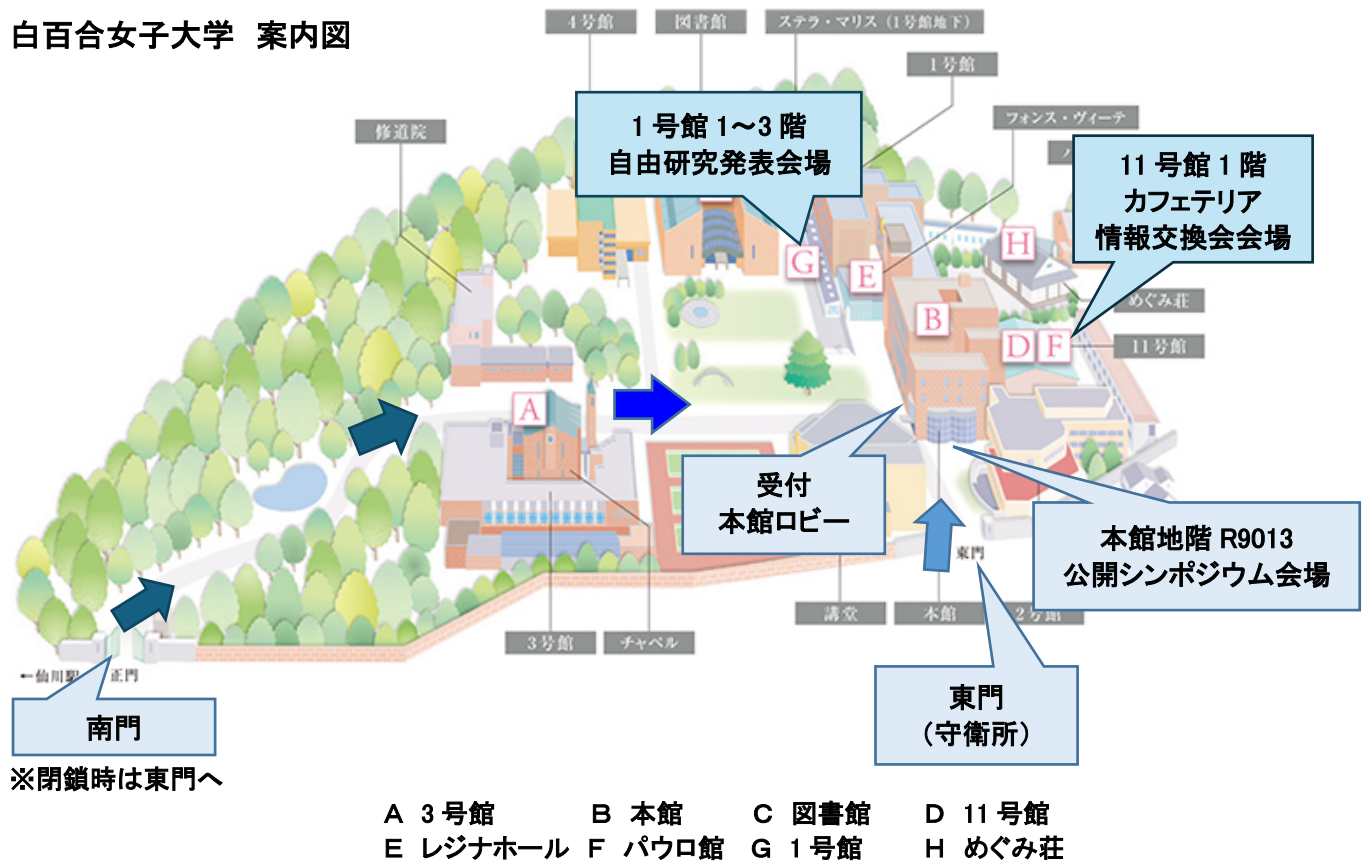
日本学校教育学会第38回研究大会準備委員会事務局（委員長：神永典郎）

E-mailアドレス：jase38th2024@gmail.com

※日本学校教育学会への入会や年会費納入の確認等、第38回研究大会以外のことについては、学会事務局までお問い合わせください。Email：JASE.officialmail@gmail.com

会場案内図

白百合女子大学 案内図

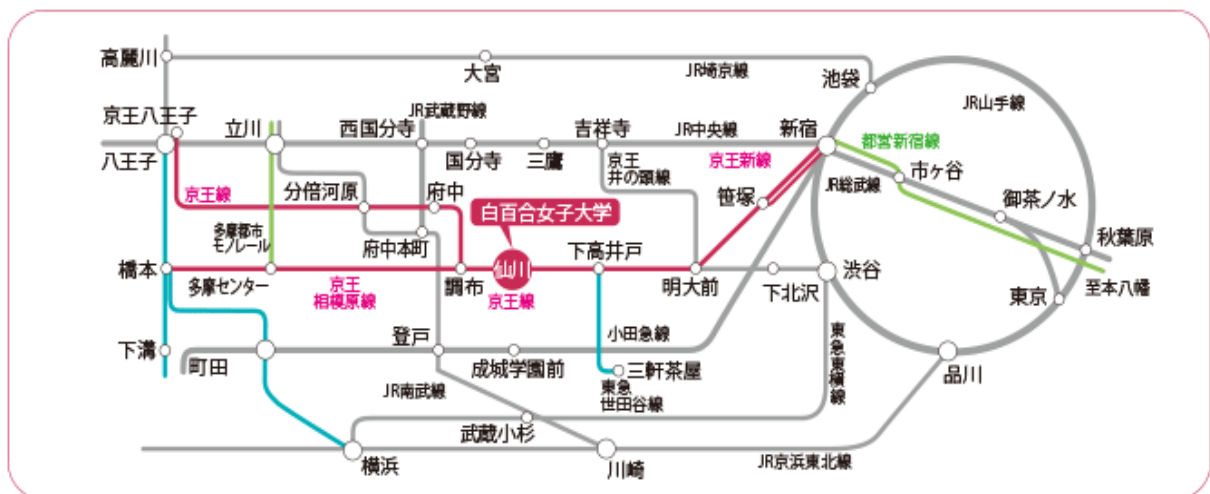


白百合女子大学

住所: 東京都調布市緑ヶ丘 1-25
電話: (東門守衛所) 03-3326-5144 (内線 829)

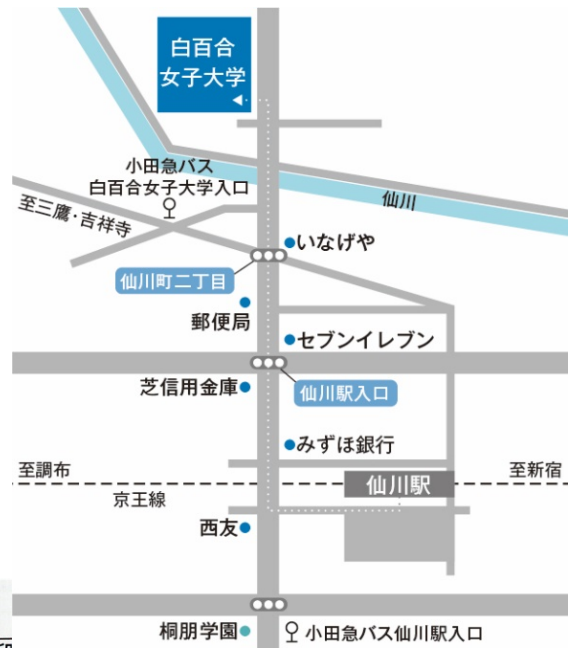
白百合女子大までのアクセス

※なるべく、公共交通機関をご利用ください。

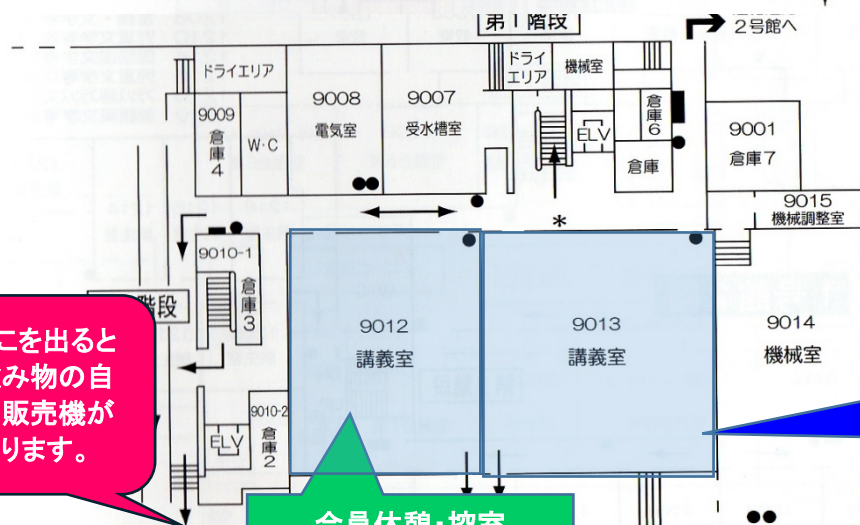


※JR東京駅から白百合女子大学までの電車利用の約 60 分 ※乗り継ぎ、徒歩時間を含む。
(経路: JR中央線快速→新宿駅乗換、京王線(準特急: 千歳烏山駅で各駅に乘換、または、区間急行・快速で直通)→東京駅～仙川駅間が約 45 分。下車後、徒歩約 10 分。)

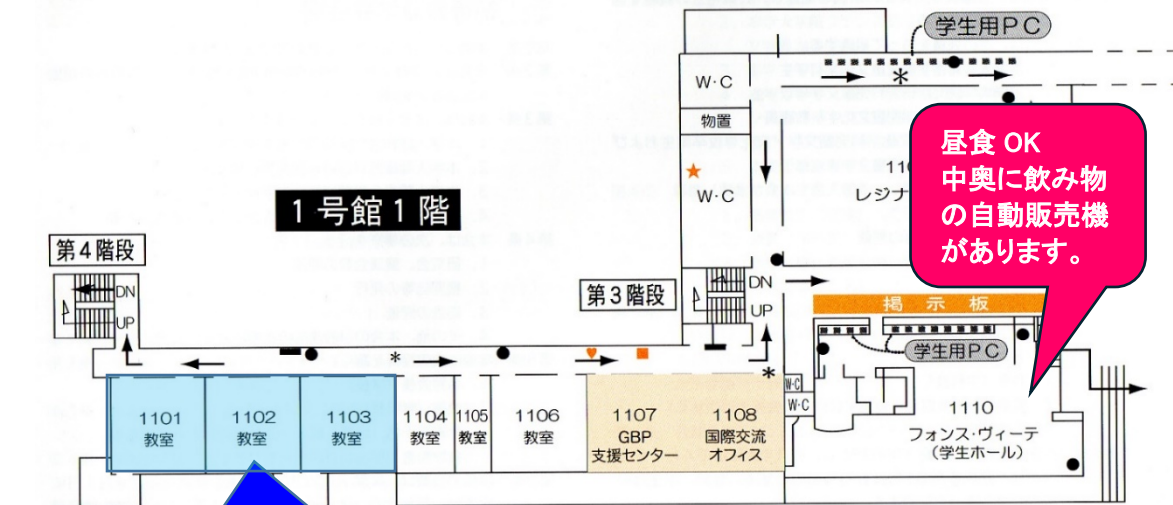
京王線「仙川駅」より
白百合女子大学まで
徒歩 約10分



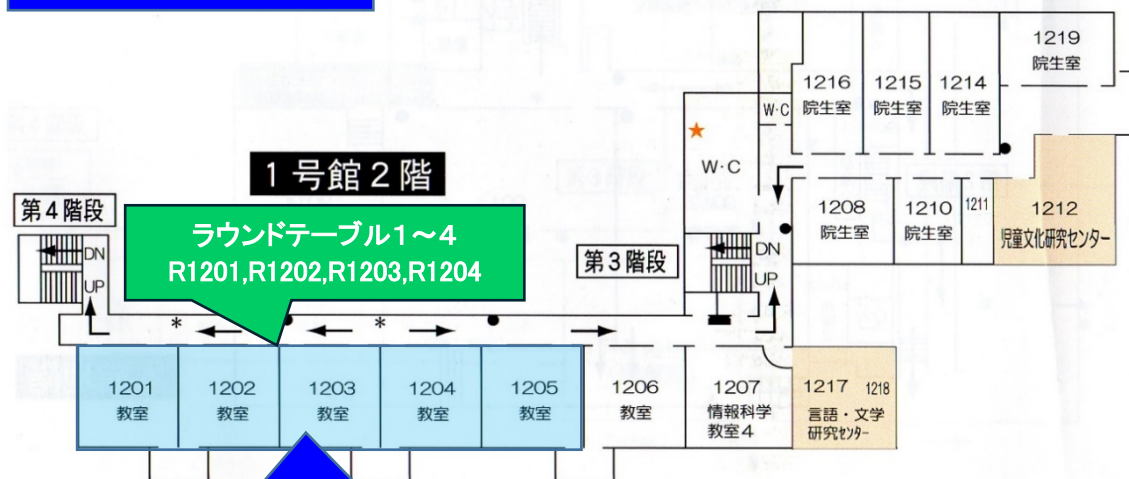
■本館 (9号館)



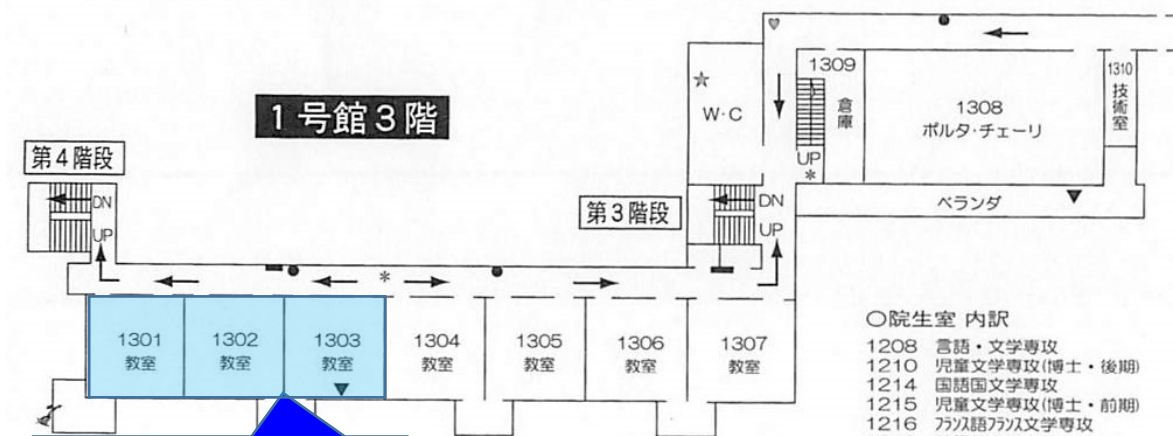
■ 1号館



自由研究発表10~12
R 1101.1102.1103



自由研究発表4~9
R 1201.1202.1203,1204,1205



自由研究発表1~3
R 1301.1302.1303

○院生室 内訳

- 1208 言語・文学専攻
- 1210 児童文学専攻(博士・後期)
- 1214 国語国文学専攻
- 1215 児童文学専攻(博士・前期)
- 1216 フランス語フランス文学専攻
- 1219 英語英文学専攻

課 題 研 究

転換期の学校と教師－授業の画一化にどう対応するか

今期、研究推進委員会では「転換期の学校教育」を3年間にわたる共通テーマとして掲げ、課題研究に取り組んでいる。転換期の学校というフレーズそのものは、この四半世紀あまりにわたって用いられてきた。グローバリゼーションとICT（情報通信技術）の飛躍的発展、また昨今では、モノのインターネット（IoT）、人工知能（AI）やロボットの開発、その一方で地球環境の危機的状況、少子高齢化等のもと、社会の産業構造や労働市場、人々の日常生活が大きく変化するなか、学校における教育の内容と方法のあり方は転換が求められてきたのである。

初回にあたる昨年度は、「転換期の学校と子ども一学びをどう保障するか」というタイトルのもと、転換期の学校における多様な子どもたちの学びの保障のあり方について検討した。第2回となる本年度は、上記タイトルのとおり、転換期の学校における教師の教育実践に焦点をあてることにしたい。

もとより学習指導要領や教科書検定といった国家による統制があるなか、とくに2000年代以降は、教員育成指標や、教育（授業）スタンダードの制定など、地域行政・学校レベルでも、教育の営みを画一化しようとする動きは強まっている。この一方で、GIGAスクール構想により、一人一台端末と校内LANの整備が急ピッチで進められ、デジタル教科書も導入された。こうした教育環境の大きな変化の中で、授業の画一化が進んでいることはないか、検証の必要が生じている。

本課題研究では、まず、教師による授業実践、教育の営みを画一化する構造についての理解を深めることにしたい。そのうえで、こうした状況下での、教師独自の授業実践、自律的な学級経営の可能性について具体的な事例をもとに探っていく。国家、地域行政、学校と各レベルでみられる画一化の動きのなかで教師の自律的な授業実践の糸口はどこにあるだろうか。活発な議論を行いたい。

【登壇者】

子安 潤（愛知教育大学名誉教授）

中村 映子（公立小中学校スクールカウンセラー）

中澤 純一（東京未来大学）

【司会・進行】

金井 香里（武蔵大学）

黒田 友紀（日本大学）

ラウンドテーブル1

「実践者のための論文の書き方講座」

研究実践委員会 石森 広美（北海道教育大学）

趣旨

優れた教育実践は、多くの教育研究者および実践者に共有されるべきものです。しかし、それが公開されることなく現場にうずもれていることが多々あります。学校現場等の実践者から投稿された論文については、実践内容は意義深いものであっても、論文としての作法や体裁が整っていないために、学会誌への掲載に至らないケースが多々あります。また、論文化へのハードルが高いので気後れする、あるいは書き方がよくわからない、というケースも多々あると推察されます。

優れた実践を記録、すなわち、実践論文や研究論文等として残し、またその手法や成果を広く学会で共有することは、本学会の発展にとって極めて重要であると考えます。研究実践委員会においては、オンライン・オフラインにて、研究者・実践者である会員が学び合うオープン実践研究会を継続的に展開し、実践と研究をつなぎ、優れた実践から共に学び合う機会を提供してきました。さらに、そこで発表された実践者の方々の実践をまとめるサポートをしてきました。

そこで、本ラウンドテーブルでは、あらためて実践者の方々向けに、論文の書き方講座を実施いたします。

内容

自分の実践を論文化したいと考える学校現場等の教育実践者向けに、論文の書き方のポイントをお伝えします。

対象

幼・小・中・高・特別支援学校等現職教員・管理職（退職された教員を含む）等、実践者である学会員（大学院生を除く）

ラウンドテーブル（10:40～11:50：70分）

1. 研究実践委員会委員長挨拶（5分）中山委員長
2. 論文の作法、最低限抑えたい事項をプレゼンテーションにまとめ、資料に基づきながら簡単に説明（25分程度）石森委員
3. 説明についての質疑応答（10分）石森委員
4. 実践者による体験談（10分）佐藤栄太郎委員
5. ディスカッション・参加会員との交流（15分）
6. まとめ（5分）

参考文献

- 石森広美(2016)「問題提起－実践者の視点で行う研究」日本学校教育学会編『これからの学校教育を担う教師を目指す』学事出版, pp. 68-75.
- 石森広美 (2019)『「生きる力」を育むグローバル教育の実践』明石書店
- 根津朋美(2016)「教育実践をどのようにして研究論文にするか」日本学校教育学会編『これからの学校教育を担う教師を目指す』学事出版, pp. 84-90.



ラウンドテーブル2

国際交流委員会のこれまでの活動の成果と今後の方向性

林尚示（東京学芸大学）、元笑予（帝京平成大学）、眞壁玲子（文京学院大学）、牛志奎（馬鞍山師範高等専科学校・中国）、日下部龍太（清華大学・中国）

1 はじめに

国際交流委員会は「日本学校教育学会会則」の第17条1に基づいて設置されている委員会である。これまでに海外スタディツアーの企画運営やミニ国際交流シンポジウムを企画実施し、国際交流を促進する活動を行っている。現在の委員は、委員長・林尚示（東京学芸大学）、副委員長・林明煌（嘉義大学・台湾）、委員・小嶋祐伺郎（芦屋大学）、牛志奎（馬鞍山師範高等専科学校・中国）、元笑予（帝京平成大学）、下島泰子（お茶の水女子大学）、眞壁玲子（文京学院大学）、委員兼幹事・伊勢祐美子（世田谷区立若林小学校）、周勝男（厦門大学嘉庚学院・中国）オブザーバー・日下部龍太（清華大学・中国）である。本ラウンドテーブルでは、2023年度の活動の成果の確認と2024年度の活動の方向性の検討を行う。

2 検討の方法

2023年10月の台湾スタディツアーの成果を公表した論文の分析、2024年2月のマレーシアスタディツアー（実践研究委員会との共同実施）やミニ国際交流シンポジウムの報告、2024年度以降の活動に向けた中国の最新情報の共有などをもとにディスカッションを行う。

3 報告

3.1 国際交流委員会の2023年度の活動

3.1.1 台湾スタディツアーの振り返り（林）

2023年10月25日-28日、3泊4日で台湾スタディツアーを実施した。訪問先は国立嘉義大学（英語：National Chiayi University、NCYU）と台湾南部のインターナショナル・バカロレア校のビクトリアアカデミー（英語：Victoria Academy, Taiwan、公用語表記：維多利亞実験中小学）であった。国立嘉義大学は2000年に国立嘉義技術学院と国立嘉義師範学院が統合されて設立された大学で、7つの学部と20以上の学科、大学院、研究所、附属学校などをもつ総合大学である。このスタディツアーの様子は、「台湾の教育とインターナショナル・バカロレア校における初等・中等教育段階の授業実践—幼児児童生徒の日常生活に根差した授業内容を意識して—」と題して『日本学校教育学会年報』（第6号、2024）に掲載されている。そのため、ラウンドテーブルではこの論文も活用して報告を行う。

3.1.2 マレーシアスタディツアー（実践研究委員会・国際交流委員会）の振り返り（眞壁）

スタディツアーの概要は以下の通りである。2024年2月12日、成田発、ペナン着。2月13日、国立総合大学マレーシア科学大学の言語・リテラシー・翻訳学部において教育学部研究者も交えた教育に関する学術交流を行なう。2月13日、マレーシア科学大学海洋・沿岸研究センターを訪問し、海洋や沿岸のエコシステムの研究についてレクチャーを受け、施設を見学する。2月14日、ペナン日本人学校を訪問し、授業を参観する。マレーシア最大の仏教寺院である極楽寺を訪問し、宗教事情を研究する。2月14日、国際交流委員会ミニ国際交

流シンポジウムを実施する。2月15日、ロヒンギャ族難民施設を訪問する。世界遺産のジョージタウンを訪問し、多文化共生の研究をする。以上の現地の活動を通して得られた成果を報告する。

3.1.3 マレーシアスタディツアーでのミニ国際交流シンポジウムの振り返り (元)

2024年2月14日、16:00-17:30（マレーシア時間）にミニ国際交流シンポジウムが開催された。今回は日本学校教育学会のマレーシアスタディツアーとのコラボレーション企画として実施され、マレーシアのミニ国際交流シンポジウムは Zoom オンラインと対面でのハイブリッドの形で開催された。マレーシアを拠点として、日本、中国、台湾、ベトナムをオンラインでつないで実施された。ミニ国際交流シンポジウムの内容は、帝京平成大学における国際交流について活動の事例等の紹介である。まず、人文社会学部経営学科専任教員3名より、帝京平成大学の歴史、留学生者数、国際交流センターの創立・活動、キャンパスメート（部活動）、1年生日本人学生と留学生の合同セミナー、ComoRevi（学修支援室）、日本語カフェ、他学科との交流、学園祭（留学生企画）、掲載論文（5本）などを紹介した。次に、在学留学生3名より、実際に関わった活動を紹介した。具体的には、まず、経営学科2年生（中国出身）が留学生セミナーと日本人学生セミナーとの合同授業について、次に同学科2年生（ベトナム出身）が他学科との国際交流活動について、同学科3年生（中国出身）が学園祭（留学生企画）について紹介した。その後、全体質疑では、マレーシア側の先生からコメントを頂戴した。最後は、台湾の林先生が閉会の挨拶をされた。今回のミニ国際交流シンポジウムは、今後も学校教育に新たな価値をもたらす画期的な場として、持続的な協力により、学会会員の間で広く共有され、日本国内外で実践されることが期待される。

3.2 国際交流委員会の2024年度の活動の方向性

3.2.1 タイスタディツアー（実践研究委員会・国際交流委員会）の実実施計画 (林)

現在、実践研究委員会の中山委員長のご尽力でタイスタディツアーを企画している。中山委員長と林で2024年9月17-19日にタイのナレスワン大学（英語：Naresuan University、公用語表記：มหาวิทยาลัยนเรศวร）の教育学部や近隣の小学校を訪問し、タイスタディツアーの実現に向けた打ち合わせ会を行う。国際交流委員会では、参加者募集と諸手続き、現地での参加者支援（移動やホテルのチェックイン・チェックアウト等の手続き）、報告書の企画作成などを行う予定である。なお、ナレスワン大学はタイのピッサヌローク県にある国立大学で、1967年創立の大学である。

3.2.2 中国の教育の最新状況（牛）

2024年6月長春、蘇州での外国人殺傷事件は世界で大きな反響を呼んだ。これは偶発事件なのか、それとも中国の教育に関係にあるのか。最近10年間、習近平就任以来、「憲法」、「教育（基本）法」、「義務教育法」、「学習指導要領」などの改正と「反スパイ法」、「愛国主義法」などの実施にともなって教育改革が全面的に実行され、価値観教育、思想道德教育、愛国主義教育を一気に強化している。本発表では、これらの主要な教育施策を踏まえて最新の中国の教育の現状紹介をするつもりである。

4 ディスカッション

上記報告を生かして、ラウンドテーブルに参加の会員の皆様と国際交流委員会の2024年度の活動についてのディスカッションを実施する。

ラウンドテーブル3

学校と市民の教育活動のゆるやかな連携について

澤井 史郎（インターナショナルイスラミーヤスクール大塚）

1 テーマの要旨

教育の目的は児童生徒の自立にある。その目的を達成させるためには学校は非常に有効な教育施設である。それ故、保護者や子どもは学校の存在について疑いを殆ど抱かなかったし、地域の人たちは地元の学校として惜しみなく協力をしてきた。しかし、グローバル化の進展やコロナ渦での休校やオンライン授業で子どもたちは多くの時間を家庭で過ごすことになった。そしてスマホやパソコンで新しい情報に触れたり、ネット上のコミュニティーを作り上げたりしてきた。その結果、子どもたちの学校に対する考え方にも変化が生じている。私の共創研附属実践教室に通ってくる子どもたちと近隣の中学校の協力を得て行った学校に対する見方に関する調査によると「必ず行かなくてはならない場所」から「行きたくない時には行かなくても良い場所」に変わってきた。主な理由としては、教科書と同じことを教えるつまらない授業を受けるなら自宅で YouTube で配信されている授業を見て勉強すれば良いし、塾に通う方が成績が伸びると考える子どもたちの増加が挙げられる。この傾向と学力の相関関係はそれほど見られない。不登校ではないが学校へ行きたくない子どもが増加している背景には、子どもたちの新しい価値観への対応が遅れている学校があることが原因の1つになっているように感じる。一方で市民の教育活動にも新しい動きが見られる。不登校の子どもたちを支援する団体、特別支援を要する子どもたちのための学童、外国人の子どもたちを支援する団体等、様々な団体が誕生し始めている。いずれの団体にも共通する考えは、学校だけが教育する場ではないということである。そこには、不登校の子どもたちは無理をしてまで学校へ行く必要がないという考えや学校教育に対する不信感がある。子どもたちが自立するために何よりも大切なことは、安心して過ごせる居場所があるとは言ってもない。そのためには今までの学校中心の教育から学校と市民の教育機関の連携、市民の教育機関相互の連携が必要になってくる。そこで本ラウンドテーブルでは、学校と市民の教育機関のゆるやかな連携のあり方について、市民の教育機関から見た学校教育に焦点を当て、これからの教師と市民の新しい連携のあり方について意見交換をして、教育の目的である「自立」を達成することに寄与することにある。そのために問題提起として1つは、市民の様々な私設教育機関を運営する教育者や学生の意見、もう1つは、私設教育施設の役割と問題点についての意見を述べていただく。これを元に学校と市民の教育機関との新しい連携について、ポジティブに意見交換をすることを願っている。

2 問題提起、総括、司会

問題提起	フェルナンド・ダナンジ	カーメズ・ネスト代表（モンテッソーリ子ども食堂 学童経営者）
	大内 透	コージュリー代表（特別支援教育のための学童経営者）
	阿部 龍	成蹊大学（学生）
総 括	多田 孝志	金沢学院大学
司 会	澤井 史郎	インターナショナル

ラウンドテーブル4

高校探究学習の考え方・進め方 —高校総合学習（探究）を中心として—

○和井田清司（武蔵大学） ○山田一貴（埼玉県立高校）
○渋谷拓真（都立高校） ○和井田祐司（京都橘大学）

1. 高校探究学習の意義と課題（和井田清司）

学習指導要領の改訂にともない、高等学校（以下高校と略記）での新教育課程が2022年度より展開中である。2024年度には3年次まで新課程になる。

今回の初等・中等教育段階の学習指導要領において、改訂の本丸は高校での授業改善にある（田中博之『高等学校探究授業の創り方』2021.p.19）。そのため、高校指導要領は、かつてない大改訂となった。本文が1.5倍になり、55科目中27科目が新設・見直しとなった。「理数探究」や「総合的な探究の時間」が新設され、国語科や地歴科でも探究科目（古典探究・地理探究・世界史探究・日本史探究）が設置された。こうして、随所に「探究学習」の導入が強調されているところが、注目される。

教育課程の改訂と連動しかつ並行して、教育方法（「主体的対話的で深い学び」、アクティブ・ラーニングの視点）、教育評価（観点別評価）、学校経営（社会に開かれた学校）、教育課程経営（「社会に開かれた教育課程」、カリキュラム・マネジメント）等、多面的課題が目白押しである。コロナ禍への対応やICT活用も迫られている。こうして高校現場の現状は、改革諸課題の重圧にさらされているように見える。

多忙化の進行する高校現場で、探究学習に取り組むとき、様々なカベが待ち受けている。生徒のなかに深い問いを自分ごととして生成させるためには、学外との連携を含め一定の仕掛けが必要となる。そのための時間・予算・スタッフをどう確保するか。また、地域や高校の特性、生徒の状況やニーズに対応したカリキュラムの開発、学習方法のデザイン、探究ツールの整備をどう進めるか。のりこえるべきカベは多い。

探究学習で留意すべきは、知識伝達型の定型的授業とは原理が異なる点である。教えられて学ぶというかたちではなく、生徒がみずから生成した問い（問題場面）にもとづいて試行錯誤しつつ、納得解（解決場面）に向かうプロセスが重要となる。教師側の主導性が強すぎると生徒側の自律性が失われる。既成のパッケージに頼りすぎると、表面的な「探究」とどまりかねない。

印象的な感想にとどまるのだが、最近、高校生のなかに「探究づかれ」とでもいうべき現象が生じていないだろうか。探究学習に際して、消極的な姿勢を示したり、要領よくパターン化して済ませようとしたりする傾向である。形式化した探究学習の経験が重なっていくと、そうしたマイナスも危惧されるところである。

ところで、なぜいま「探究学習」が求められているのだろうか。特に高校段階で強調される背景は何だろうか。それは、社会の動向と無縁ではない。今日、世界の動向をみると、民主主義的潮流の後退や権威主義の台頭が目に見える。不寛容な傾向もさまざまなレベルで、顕著になっている。その一方で、性の多様性や異文化への理解促進、気候変動や難民等へのNGO・NPO活動の多層的な展開、協同労働にみられる新しい働き方の模索など、可能性の芽も成長している。いずれにしても、社会の在り方や人の生き方について、深く探究することが求められる時代になってきたといえる。

周知のことだが、情報化、グローバル化、人口減による縮減社会化の進展は、社会

変動の主因となっている。社会の変容に応じて教育の改革も必至となる。だが、今次改革の含意は、社会変化に教育面で消極的に対応する施策としてではなく、未来社会を拓く地図として教育改革を位置づけ、学校教育を通してよりよい社会を展望するところに重点がある。高校生を「生涯にわたって探究を深める未来の創り手」（指導要領解説『総合的な探究の時間編』2018.p.4）として送り出すという指摘にも、その意図を感じる。たしかに、過去や今日の延長線上に明日があるという実感は少ない。量的な変化の速さというより、質的な改革が要請されている。そのためには、あらためて与件を問い直し、学校と社会のラディカル（radical 根源的）な再設計が必要となる。

さらに 18 歳成人段階をむかえ、社会人直前の高校生に、探究学習を通して未来社会の創り手としての成長を期待するねらいもあるだろう。それらの意味で、今次高校教育課程改革の可能性の中心は、探究学習の推進にあるといえるのではないだろうか。

ただ、よりよい学校教育を通してよりよい社会の創造へという場合、何がよい社会か、何がよい学校かという吟味は欠かせない。探究学習を核とした学校教育改革にしても、そもそも探究とは何か。教育課程に制度化された探究学習において、教科の探究と探究の時間との共通性と差異は何か。理論的かつ実践的に問われる課題である。そこで、本ラウンドテーブルでは、高校教育改革の可能性の中心として、「探究学習」の導入と展開に着目し、探究学習の本質・実践の視点と方法・実践上の諸課題等について、議論を進めていきたい。主な論点として、次のような諸点をあげてみたい。

- ① なぜ今、「探究学習」が強く求められているのか。
- ② そもそも「探究」学習とは何か。「問題解決」学習と同じものなのか。
- ③ 総合学習（探究）と教科学習（探究科目）での「探究」の共通性と差異は何か。
- ④ 高校探究学習の高校カリキュラム全体における位置づけと意義は何か。
- ⑤ 高校探究学習の推進を可能とする学習環境をどのように構築するか。
- ⑥ 探究学習を指導する教師側のスキルは何か。どのように伸ばしていけるのか。

今年度は、「総合的な探究の時間」の可能性と課題を主に検討する。次年度以降も継続し、角度を変えつつ、高校探究学習の構造把握と実践展開の手かぎりを求めたい。

2. 普通科における高校総合学習（探究）（山田一貴）

埼玉県東部に位置する進学校である県立 K 高校では、2022 年度から本格的にスタートする「総合的な探究の時間」への危機感から、2021 年度より 1 年次を対象に、SDGs をきっかけとした探究学習の実践に取り組んでいる。従来は、LHR と総合的な探究の時間での実施内容の担当部署との日程調整に留まっていた LHR 及び総合的な学習（探究）の時間運営委員会が主体となり、学年団と協働した実践づくりをスタートする。同様の危機感を共有する委員の教員数名が中心となり、企画、提案を行っている。なお、報告者は 2021 年度より 2 年間、LHR 及び総合的な学習（探究）の時間運営委員会の委員長として実践づくりの中核を担った。

同校ではこれまで体系的な探究学習の実践の蓄積がなかったことから、まずは学習指導要領解説にある「探究における生徒の学習の姿」を参考に、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現のプロセスを経験する実践を構想した。生徒の興味、関心を学習のスタート地点とするために、SDGs の 17 の目標のうち、最も興味のあるものを生徒には選択してもらい、同じ目標に興味を持った生徒同士でグループを構成し、グループ（4～6 名）ごとでの探究学習とした。例えば、ドイツと日本の労働時間と平均年収に関する課題を設定したグループは、日本の長時間労働に対する法規制の弱さの問題点などを指摘した。従来から行われている内容との兼ね合いから、2021 年度は 7 時間程度、2022 年度は 9 時間程度という限られた時間での実践ではあった。しかし、探究学習のプロセスの一巡を生徒だけでなく、教員も体験することができた。特に、2022 年度は 1 年次に所属しない教員にも生徒の指導に一部参加してもらった。結果、探究学習による生徒の成長の様子や指導方法の課題などについて

て、より多くの教員と共有することができた。

当日の報告では、具体的な探究学習の取り組み内容や教員の様子などを紹介するとともに、体系的な探究学習の実践の蓄積のない普通科における高校総合探究の課題について共有し、後半の議論のきっかけとしたい。

3. 総合学科における高校総合学習（探究）（渋澤拓真）

総合学科とは、普通教育を主とする「普通科」、専門教育を主とする「専門学科」に並ぶものとして、1994（平成6）年度から導入された第3の学科である。

その特徴は多岐にわたるが、主なものとして、①普通科に存在する科目に加え、専門的な幅広い選択科目が用意されており、生徒たちは自分自身の進路を考えながら科目選択を行っていくこと、②「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」の授業を通して、「自己理解」「他者理解」「職業理解」を深め、自分自身の将来について真剣に考えるキャリア教育が充実していること、などがあげられる。

東京都では、1996（平成8）年度の都立晴海総合高校を端緒に、現在まで15校（全日制は10校）の総合学科が開校されている。それぞれ特色のある教育活動を展開しているが、1例として報告者が勤務する総合学科での探究学習を紹介したい。勤務校では、1年次より金曜5・6時間目をキャリア教育の授業として、TTで実施している。

1年次に「産業社会と人間（キャリアデザイン）」を履修するが、4月に「フレッシュマンセミナー」で「自分自身が高校3年間でどのようなことを実現したいのか」「将来の目標を実現・決定するために必要な選択科目」などを考える2日間の学校行事が存在する。1学期は「自己理解」をテーマに自分自身の将来を徹底的に考え、2学期以降は「職業理解」をテーマに「職業人インタビュー」を実施する。なお、報告者は2021年度にキャリアデザインの授業を構成する担当となり、上記の学習を実施した。

2年次の「総合的な探究の時間」では、3年次の「課題研究」に備え、「自分史探究」や「ビジネスグランプリコンテスト」を実施する。2学期以降は「プレ課題研究」として、論文の書き方や、資料の探し方、調査の仕方などを学習しながら、3年次に本格化する「課題研究」のテーマを半年かけて設定していく。

3年次は「課題研究」として、10数名のゼミに分かれ、生徒は担当からアドバイスをうけながら、調査・実験・分析を行う。7月～9月に研究成果を論文にまとめて発表し、各ゼミの代表の中から選ばれた生徒が、全校の課題研究発表会で発表を行う。

総合学科ならではのキャリア教育・探究学習は、普通科の探究学習とは異なり、ある程度体系化されているように感じられる。普通科でも探究学習が広く実施されるようになって、様々な課題も浮上している。当日の報告では、総合学科における探究学習の具体的な実践について紹介するとともに、課題などについても共有し、これからの学校に求められる探究学習のあり方について議論ができれば幸いである。

4. 「教育探究コース」のコアとしての総合学習（探究）の実践（和井田祐司）

私立大阪暁光高等学校（大阪府河内長野市）では、2017年から普通科「教育探究コース」を開設している。同コースは教員養成課程を視野に入れた高校教育コースである。コースのコアとして、「総合的な探究の時間」を含むコース専門科目、「教育・人間探究の時間」を設置しており、この時間を活用し、小学校等への観察実習や、市教委や市民と共同する地域学習、人間理解につながるテーマ学習、卒業論文の作成と発表等を展開してきた。それらの活動時間を十全に保障するために、2017－21年度は3年間で11単位時間、2022年以降は10単位時間を配当している。また、特別活動とも連動させることで、より厚みのある活動を実現している。

教育探究コースの開設にあたり重視されたのは、学園の教育文化や実践蓄積に依拠した設計である。つまり同コースは1950年に創設された「千代田高校」以来の実践知の継承としての意味をもつ。その一側面を挙げるならば、学習活動を通して安心できる学びの空間を作

り出す地道な取り組みであり、それは“綴方的な学び”を通した学習対象と自己との往還、生徒相互の教育力・形成力の発揮、実社会に触れる学習機会を通しての探究心の触発、等の要素に支えられたものと整理できよう。

生徒たちの3年間の学びのデザインとしては、1年次は体験学習による学習観の転換・学習意欲の喚起と、文章表現を中心とした表現技法の習得を重視する。2年次以降は、地域への参画・貢献や、自律的・探究的活動としての卒業作品制作等、探究的要素が増加する。3年次のメインは、卒業作品制作である。

学習指導要領解説には「探究における生徒の学習の姿」のサイクルが図示されそこには「日常生活や社会に目を向け、生徒が自ら課題を設定する」とある。対して、「教育・人間探究の時間」では、1年次は総合性をもつ体験学習と、その「まとめ・表現」（綴方的学習）を蓄積し、2年次以降の卒業作品制作において、自ら設定した課題について時間をかけて探究する構造をとる。

当日は「教育・人間探究の時間」の内容、および構造と特長を中心に検討し、私立高校のカリキュラムにおける、探究学習の意味や可能性の考察につなげたい。

当日の運営としては前半で発表を行い、後半の冒頭で指定討論者によるコメントを受け、その後、参加者によるフリートークというかたちですすめたい。

なお、詳細な発表資料は当日会場にて配布する予定である。

7月27日（土） 12：30～13：25

【本館 地階 R9013】

定期総会

自由研究発表 1

司会 馬場 訓子 (岡山大学)

司会 奥泉 敦司 (金沢学院大学)

1) 13:35～14:05

「こどもまんなか社会」における遊びと学びに関する一考察

—主体性理解を視点として—

奥泉 敦司 (金沢学院大学)

2) 14:05～14:35 ※事情により発表が取り下げられました

保育者養成課程における「児童館実習」の現状について

—実習生の記録等をもとに—

橘田 茂雄 (帝京学園短期大学)

3) 14:35～15:05

幼稚園や保育所等の保育者に対するOff-JTの実施における

都道府県による実施体制の比較検討

鈴木久米男 (福島学院大学)

4) 15:05～15:35

「ベテラン教員」のリ・クリエーション (再創造) を促進させる

マイスター研修の検討 —基幹研修構築に主軸を置いて—

青木 一 (信州大学)

自由研究発表 2

司会 金井 香里 (武蔵大学)
司会 服部 孝彦 (大妻女子大学)

1) 13:35～14:05

五感を活用する<読み>の実態調査
—小中高の発達段階による差異—

○手塚 健斗 (福島大学大学院・院生)
佐藤 佐敏 (福島大学)

2) 14:05～14:35

地域民話を取り入れた童話絵本の作成と活用に関する研究
—地方の文化創成に寄与する教育的方法の提案—

山崎 保寿 (静岡大学名誉教授)

3) 14:35～15:05

英語デジタル教科書の使用に関する児童・生徒の認識

石森 広美 (北海道教育大学)

4) 15:05～15:35

スピーキング力と共に思考力を高めることを目指した英語教育

服部 孝彦 (大妻女子大学)

自由研究発表 3

司会 白井 克尚（愛知東邦大学）

司会 土屋 弥生（日本大学）

1) 13:35～14:05

小学校社会科における形成的フィードバックを通じた学習改善の実践的研究

香取 桜子（早稲田大学教職大学院）

2) 14:05～14:35

主体的な社会参画を目指す社会科の授業デザイン

松本 洋平（朝霞市立朝霞第八小学校）

3) 14:35～15:05

探究過程における振り返りをもとに考える

—総合的な学習の時間における教師のファシリテーションに関する研究—

山崎 翔（東京都文京区立小日向小学校／東京学芸大学教職大学院）

4) 15:05～15:35

教師教育におけるリフレクションの現象学的方法の検討

土屋 弥生（日本大学）

自由研究発表 4

司会 林 尚示（東京学芸大学）

司会 齋藤 道子（目白大学）

1) 13:35～14:05

子どもの自己効力感を育む児童会活動の活性化

下平 綾乃（長野県茅野市立湖東小学校・信州大学教職大学院）

2) 14:05～14:35

人権教育と道德教育のとの効果的融合を図った

総合単元的課題探究型道德学習についての研究

齋藤 道子（目白大学）

3) 14:35～15:05

自分の芯を創る道德科カリキュラム“DotoQuest”の学習理論

山田 将之（岩手県盛岡市立上田中学校）

4) 15:05～15:35

ウェルビーイングを感じる表現活動の追求

隅内 利之（隅内教育研究所）

自由研究発表 5

司会 齊藤 陽子（岐阜女子大学）

司会 村山 大樹（帝京平成大学）

1) 13:35～14:05

A I 時代における郷土教育の意義と課題：

鹿児島・奄美を題材として

島 由佳（鹿児島高等学校）

内田 富男（明星大学）

2) 14:05～14:35

多様性の尊重を目指した授業への転換

ー I C T を活用したニーズの把握を個別最適な学びの充実に生かすー

服部 紗代子（関西福祉大学）

3) 14:35～15:05

学校現場が抱える諸問題に関する考察

ータブレット端末の効果的な活用を通してー

小池 嘉志（桜花学園大学）

4) 15:05～15:35

新しい学びの時代における教師に求められる資質能力に関する一考察

～GIGAスクール構想下における教員養成課程在学生の小学校での実践を基に～

齋藤 陽子（岐阜女子大学）

自由研究発表 6

司会 西尾 理（都留文科大学）

司会 林 幸克（明治大学）

1) 13:35～14:05

高等学校「論理・表現」の授業実践報告

ー自立した学習者の育成を目指してー

伊藤 清（名古屋中学校・高等学校 英語科）

2) 14:05～14:35

通信制高校におけるシティズンシップ教育

ービースタの「主体性」概念に注目してー

中野 孝太（京都芸術大学附属高等学校）

3) 14:35～15:05

高等学校の学校設定科目における小学生との交流に関する実証的研究

ー大分県立中津南高等学校耶馬溪校「ホタル授業」に着目した考察ー

林 幸克（明治大学）

4) 15:05～15:35

世間体と自己肯定感についての一考察

ー6地方の高校生による意識調査を通してー

末吉 雄二（日本工業大学）

自由研究発表 7

司会 宇都宮 明子（島根大学）

司会 手塚 貴子（帝京大学）

1) 13：35～14：05

時事問題の学習を通じた動機づけの向上と考える力の育成を図る取り組み

—学問横断的なアクティブラーニング型授業の実践と課題—

新里 卓（日本外国語専門学校）

2) 14：05～14：35

グローバルコンピテンシーの視点から見た「総合的な学習の時間」の意義

浅井 智雄（福山平成大学）

3) 14：35～15：05

食を通じた国際理解教育

春岡 恵子（兵庫県立洲本高等学校）

4) 15：05～15：35

小学校家庭科における漬物教育の検討

—改正食品衛生法における和食文化継承の視点を中心に—

手塚 貴子（帝京大学）

自由研究発表 8

司会 中山 博夫（目白大学）
司会 安藤 雅之（常葉大学）

1) 13：35～14：05

若年教員の自律的成長を支える学校OJTⅣ
～自律と協働～

柳瀬 啓史（元公立小学校教諭：高知）

2) 14：05～14：35

自律的な学習を推進する校内研修の構築

松本 武（世田谷区立武蔵丘小学校）

3) 14：35～15：05

学級という場で他者と共に成長する子どもたち
ーデューイの「共同体」概念を手がかりにー

龐宇洋（東洋大学大学院）

4) 15：05～15：35

SDGsに対応した学習スキル開発に関する研究（経過報告）3

○中山 博夫（目白大学）
多田 孝志（金沢学院大学）
和井田 清司（武蔵大学）
石田 好広（目白大学）
峯村 康平（目白大学）

自由研究発表 9

司会 下島 泰子（お茶の水女子大学）

司会 佐藤 栄太郎（八王子市立檜原小学校）

1) 13:35～14:05

講師経験のない初任者や講師が入職期の困難をどのように乗り越えるか

：小学校での学級担任を初めて持つことになった

新卒講師Dに対するフィードバックシートの分析から

大越 啄櫻（A県B市C公立小学校）

2) 14:05～14:35

学校課題対応への一考察

～「+1」提案とその効果～

根本 裕美（日本女子大学家政学部児童教育学科 非常勤講師）

3) 14:35～15:05

教員集団内における対人関係リスク軽減の要因に関する一考察

—3名の学年主任の語りをもとに—

和田 真季（大阪公立大学大学院）

4) 15:05～15:35

小中学校における相談体制の構築に関する一考察

—学校運営における実践を踏まえて—

山中ともえ（元・全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会会長）

自由研究発表 10

司会 百合田 真樹人（独立行政法人教職員支援機構）
司会 棚野 勝文（岐阜大学）

1) 13:35～14:05

新任教員の教職意識及び教職適応に影響する出来事に関する一考察

○枝元 香菜子（金沢学院大学）
渡邊 はるか（目白大学）
藤谷 哲（玉川大学）
峯村 恒平（目白大学）

2) 14:05～14:35

離職教員の職場環境に対する認識と離職要因との関連に関する考察

○渡邊 はるか（目白大学）
峯村 恒平（目白大学）
枝元 香菜子（金沢学院大学）
藤谷 哲（玉川大学）

3) 14:35～15:05

公立中学校における働き方改革
－A県B中学校の事例をもとに－

山中 樹（群馬県公立中学校）

4) 15:05～15:35

生産性に焦点をあてる学校の働き方改革の視点とその実践事例

百合田 真樹人（独立行政法人教職員支援機構）

自由研究発表 11

司会 黒田 友紀（日本大学）

司会 牛渡 淳（仙台白百合女子大学）

1) 13:35～14:05

子ども主体の学びに対して教師が抱く不安要素について

齊藤 慎一（東京都杉並区立四宮小学校）

2) 14:05～14:35

学び合う組織を追求する職員室経営

～教職員の関係性の質の改善を手がかりにして～

鮫島 純二（鹿児島県公立小学校）

3) 14:35～15:05

指導主事養成のための教育プログラムの開発

—教職大学院をはじめとする現職教員の学びの場における活用を通して—

○伊東 哲（東京学芸大学 教職大学院）

○浅野 あい子（東京学芸大学 教職大学院）

4) 15:05～15:35

女性管理職の登用の現状と課題：多様な登用ルートの可能性

○平出 恵利子（神奈川県教育委員会）

○黒田 友紀（日本大学）

自由研究発表 12

司会 出羽 孝行（龍谷大学）

司会 蜂須賀 洋一（上越教育大学）

1) 13:35～14:05

国民教育研究所「四県調査」における森田俊男の役割の検討

和井田 祐司（京都橘大学）

2) 14:05～14:35

就学援助法制の転換と学校給食の意義

—青森県学校給食無償化に着目して—

栗原 千春（東京学芸大学）

3) 14:35～15:05

韓国における高等学校の「創意的体験活動」の評価の活用方策

出羽 孝行（龍谷大学）

4) 15:05～15:35

日本植民地下台湾における漢人教師の日記研究

—台湾第一師範学校附属公学校宋籐才の「煩悶の記録」（1927～1929）—

日下部 龍太（東京学芸大学連合大学院学校教育学研究科博士課程）

公開シンポジウム

テーマ

今、転換が求められる教育観・学校観を巡って ～ ウェルビーイングな学校・授業を創る ～

2023年6月に公表された「教育振興基本計画」では、「ウェルビーイング (well-being)」の向上がその柱の一つになっています。誰一人取り残さない学校教育の実現は、すべての人々共通した願いとも言えます。しかし、学校教育の現場を取り巻く課題は山積し、教員の働き方改革への機運が高まっています。こうした状況の中、私たちは、「ウェルビーイング」が、これからの学校教育の在り方を考える重要なキーワードになってきていると考えています。

子供たちが明日も学校に行きたい、学ぶことが楽しいと感じるような学校や授業、教師も一人一人が輝き、仲間とともに働きたいと思えるウェルビーイングな学校をつくるためには、どのような取り組みが必要なのでしょう。私たちはこれまでの教育観・学校観から、どのように転換を図っていったらよいのでしょうか。

本シンポジウムではこのような問題意識から、副題を「ウェルビーイングな学校・授業を創る」として、シンポジストの方々のご研究やご考え、実際に取り組まれてきたご実践をご紹介いただきながら、ご参加の皆様も交えて、これからの新たな学校教育の在り方について議論を深めていきたいと考えています。

<コーディネーター>

中田 正弘 (白百合女子大学)

<シンポジスト>

原田 信之 (中部大学)

山辺 恵理子 (早稲田大学)

中島 晴美 (埼玉県上尾市立上平小学校)

井原 英昭 (東京都練馬区立小中一貫教育校大泉桜学園)

7月27日（土）18：00 ～ 20：00

【11号館 1階 カフェテリア】

情報交換会

時 間 18：00 ～ 20：00
会 場 11号館 1階 カフェテリア

<当日まで参加申込で参加可>

- * 7月27日（土）当日まで、Peatixで「情報交換会」のチケットを購入していただき、参加することが可能です。
「大会参加申込み」と同様のPeatixより、「情報交換会」のチケットをご購入ください。
- ※当日に「情報交換会」チケットをご購入の場合は、Peatixよりチケットの画面を確認させていただきますので御了承ください。

<「情報交換会」参加費の支払い>

- * 「情報交換会」の申込みは、大会当日まで可能です。
- * 「大会参加費」の支払と同じ Peatixのサイトの「チケットを申し込む」のメニューから
 - ・正会員・臨時会員：情報交換会参加費（大会参加申込に加えて）¥6,000
 - ・院生・学生：情報交換会参加費（大会参加申込に加えて） ¥3,000のいずれかを選択してご購入ください。

※追加の料理や飲み物の準備をしますので、できれば7月25日（木）までに
チケットを購入していただけますようお願いいたします

【大会参加申込み：Peatix の URL】
<https://2024jase38th.peatix.com/view>

【QRコード】



＜日本学校教育学会第38回研究大会 プログラム＞

発 行 日：2024年7月25日（確定版）

発行・編集：日本学校教育学会第38回研究大会準備委員会

＜準備委員会＞

委員長	神永 典郎	（白百合女子大学）	knorio@shirayuri.ac.jp
副委員長	中田 正弘	（白百合女子大学）	mnakada@shirayuri.ac.jp
	曾我部多美	（白百合女子大学）	
	針谷 玲子	（白百合女子大学）	
	西尾 理	（都留文科大学）	
	村山 大樹	（帝京平成大学）	
	松本 洋平	（朝霞市立朝霞第八小学校）	

＜協力・支援＞

中山 博夫（目白大学） 実践研究委員会の皆様

【大会準備委員会事務局】

白百合女子大学（〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25）

日本学校教育学会第38回研究大会準備委員会事務局（委員長：神永典郎）

E-mailアドレス：jase38th2024@gmail.com

※日本学校教育学会への入会や年会費納入の確認等、第38回研究大会以外のことについては、学会事務局までお問い合わせください。

【日本学校教育学会事務局】

日本大学文理学部教育学科（〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40）

TEL：03-5317-9370（事務局長 田中謙研究室直通）

Email：JASE.officialmail@gmail.com

